

氏 名：茂 野 香おる

学位の種類：博士（看護学）

学位記番号：甲 第62号

学位授与年月日：平成27年 3月17日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論文題目：現任教育の一環として臨床看護研究を行った看護系大学出身の
中堅看護師の経験

The Experiences of Proficient Nurses Graduated from
University Who Conduct Clinical Nursing Research as
Employee Staff Development

論文審査委員：主査 筒 井 真優美

副査 坂 口 千 鶴（正研究指導教員）

副査 守 田 美奈子（副研究指導教員）

副査 鶴 田 恵 子

副査 佐々木 幾 美

論文内容の要旨

【研究の動機と背景】

現在、日本国内の多くの病院では現任教育プログラムにおいて看護研究が組み込まれ、臨床でケアを提供している看護師が看護研究を行うことが一般的となっている。臨床における看護研究は看護実践の質の向上のために重要と考えられ、研究を通して実践から知識を得て、その知識を実践に活用することが求められている。このような中、研究者自身も臨床看護師に看護研究を指導する機会があり、忙しい中で熱心に取り組む看護師がいる一方、看護研究を行うこと自体に疑問を感じ、看護研究を実施する上で様々な葛藤を抱えている看護師も存在し、臨床看護師が看護研究を行うことの意義について疑問を感じるようになった。実際、先行研究においても臨床看護師が看護研究を行う上での課題として、時間の確保、計画書や論文の書き方、文献検索を行う環境、研究を推進する上での支援等が指摘されている。しかし、これらの研究は看護師全般を対象としていることが明らかとなり、看護研究の基礎知識がある看護系大学出身の看護師を対象とした研究はほとんど行われていない。そこで、看護系大学出身の中堅看護師が、看護研究を行う過程において具体的にどのような経験をし、その経験が本人にとってどのような意味をもつのかについて探求したいと考えた。

【研究の目的】

現任教育の一環として臨床看護研究を行う過程において、看護系大学出身の中堅看護師がどのような経験をしているのか、またその経験をどのように意味づけているのかを明らかにする。

【研究方法】

研究デザインは質的記述的研究である。研究参加者は、地域の中核となる医療機関に勤務している看護系大学出身の経験3～7年目の役職のない看護師で、院内で行われる看護研究の中心的役割を担う者6名であった。データ収集は、Flick (1995/2002) のエピソード・インタビューの手法を用いて、①研究開始から計画書作成までの期間、②データ収集・分析の期間、③研究終了後全体を振り返る期間で行った。参加者1名につき8か月から17か月(平均10ヶ月)の期間をかけて、5回から6回のインタビューを行った。インタビューでは、研究活動の中で印象に残る出来事を振り返ってもらい、その経験をエピソードとして感情も含めて自由に語ってもらった。語りの内容は了承を得た上でICレコーダーに録音した。データ分析は、Flick (1995/2002) の分析方法を参考に行った。語りの内容を逐語録として起した後、研究の進捗状況の中での参加者個々の出来事と、その経験をどのように意味づけているのかに注目して、文脈ごとにコード化した。得られたコードから、類似性に従ってカテゴリーを形成した。事例ごとにカテゴリーの類似性からテーマとなる内容を明らかにし、さらに複数の事例で比較検討し、特徴的なテーマを導き出した。倫理的配慮については、研究倫理審査委員会の承認を受けた(No. 2013-10)。

【結果】

1. 研究参加者の属性：本研究の参加者は、男性1名、女性5名で、臨床経験3年から7年であった。参加者6名のうち5名は今回初めて看護研究を行い、残り1名は2回目であった。
2. 看護系大学出身の中堅看護師の臨床看護研究における経験：分析の結果、以下の7テーマが抽出された。
 - 1) 大学の研究と臨床看護研究との差異に戸惑う：参加者全員、文献検索と文献検討を踏まえて、目的と一貫した研究方法をもとに大学での卒業研究を行っていた。そのため、研究環境が整わない中で、先行研究や研究方法等に関して十分に時間をかけないまま行う臨床の看護研究に対して、根底から研究概念の転換を迫られるような大きな戸惑いを感じていた。
 - 2) 戸惑いながらも自身が置かれた状況を受け止めようとする：大学で行った研究と臨床で行う研究とのギャップに困惑する参加者ではあったが、研究を行うことを拒むこともできず、研究を引き受けようとして自身を納得させていた。研究を行うと決めてからは、よりよい患者のための看護実践に向けて部署内の問題解決や実践の振り返りを目的に、研究を開始した。
 - 3) 患者の看護に活かせる研究を探求したい：研究を引き受けることに決めた参加者たちの気持ちは、患者の看護に活かしたいという強い思いがあった。そのため、多くの参加者は、臨床での看護研究を個人的な興味というよりも、現場の看護実践に即したテーマに設定していた。
 - 4) 厳しい条件の中でも科学的な研究をしようと奮闘する：臨床現場で研究を行うには十分な環境が整っていないと感じていた参加者たちは、様々な葛藤に直面しながらも患者の看護が向上するための根拠となるデータを求めようと、出来る限り科学的な方法に近づけるよう試行錯誤していた。
 - 5) 探求心に突き動かされて研究にのめり込む：参加者たちは、環境も整わず十分な支援も得られない中で、それでも自らの好奇心に突き動かされながら、研究によって得られる知見に魅

せられたかのように研究にのめり込んでいった。

- 6) **チームにおける確固たる存在になっていく**：参加者たちは、研究を遂行する上で、チームメンバーとの関係をもとに、病棟スタッフへの研究協力の要請、その他の病院内の関係者との関係も拡大させながら、様々な人々とのネットワークを構築していた。
- 7) **研究を通して自身の認識・行動の変化に気づく**：研究成果を学会や院内の発表会で報告し終えた参加者たちは、臨床における看護研究の意義や特徴を見出し、大学で経験した研究とは異なる研究の存在を認め、研究の概念を拡大して考えていた。また、自ら行った研究についての限界を自覚して非常に厳しい評価をしていたが、臨床での看護研究を通して根拠をもった看護を主体的に実践していこうと考えていた。

【考察】

- 1) **臨床看護研究への違和感を抱きつつも看護実践に活かす研究課題を探求する**：大学という研究環境が整った中で看護研究の基礎的知識を学んだ大卒看護師は、不十分な文献検討の中で厳格性を欠く研究方法で行う臨床看護研究に、研究の概念そのものを転換するよう迫られる経験をしていた。臨床看護研究に違和感を抱きつつ避けては通れないものと捉えた大卒看護師は、短期間で日常的な疑問を看護実践に活かすための研究課題へと洗練させていった。
- 2) **看護実践に還元するために科学的であろうとする**：研究を拒むこともできず、引き受けることを自身に納得させた参加者たちは、よりよい看護実践に向けて、大学で培われた探求心や好奇心を原動力にして、研究にのめり込んでいった。そこには、患者の看護に活かすための根拠を見出したいという合理的根拠づけの思考があり、臨床現場での様々な問題解決や実践の振り返りを目的に、より科学的な研究方法を試行錯誤していた。
- 3) **研究活動を通してチームに影響しうる存在になっていく**：研究への強い使命感で研究を進めていた大卒看護師は、様々な困難に直面しながらも研究チームにおける個々のメンバーの状況を理解し、メンバーが持てる能力を発揮できるよう調整して、研究チーム全体をけん引する存在となっていた。チームとして協働して行った研究の成果を報告し終えた大卒看護師は、自ら行った研究を厳しく評価しながらも、メンバーから大きな力を得られ自身も高められる組織としての学びに気づき、臨床における看護研究の意義を見出していた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、大学で看護研究を習得した看護系大学出身の看護師を対象に、臨床で看護研究を行う過程で経験する出来事とそれを本人がどのように意味づけているのかを明らかにする目的で実施された。研究方法として、看護研究開始から結果発表に至るまでを、平均10ヶ月と長期に渡る縦断的なインタビューを用いた。今回の研究において、今後臨床現場で活躍を期待される看護系大学を卒業した看護師に焦点を当て、また研究活動の過程に沿って1名につき5回から6回という綿密なインタビューを行った点で大きな意義があり、研究としてオリジナリティがあるとの評価を得た。

結果においては、研究活動における各時期での参加者の体験が丁寧に描かれ、参加者の研究に対する捉え方の変化、また多くの困難な経験を乗り越えていく過程も詳細に描かれていることに意義があるとの評価を得た。さらに、看護系大学出身の看護師が現場の改善に向けて研究的視点で取り組んでいる姿も描かれ、特に看護系大学出身の看護師のクリティカルシンキング等の思考の特徴が示されたことは新たな発見であるとの評価も得た。

今回の研究を通して、4年制大学の看護基礎教育課程において、「看護研究」を履修する意義を確認できる結果となり、今後も積極的に履修を勧めることの重要性が示唆された。また、看護系大学出身の中堅看護師が行う臨床での看護研究が、看護師自身の学びや成長だけでなく、看護実践の向上にもつながる可能性も示唆され、今後のキャリア支援に活かされることが期待された。

博士学位論文審査会では、本論文を学位規程第3条に定める博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。その後、口頭での最終試験を行い、これについても「合格」と認めた。